

表 年間予測衝突数（チュウヒ）

風力発電機 No.	令和3年				令和4年				令和5年			
	環境省モデル		由井モデル		環境省モデル		由井モデル		環境省モデル		由井モデル	
	仮配置	準備書 配置	仮配置	準備書 配置	仮配置	準備書 配置	仮配置	準備書 配置	仮配置	準備書 配置	仮配置	準備書 配置
1号機	0.00012	0.00000	0.00034	0.00000	0.00621	0.00000	0.01695	0.00000	0.00725	0.00000	0.01980	0.00000
2号機	0.01051	0.00067	0.02868	0.00184	0.00384	0.00008	0.01047	0.00022	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
3号機	0.00311	0.00311	0.00848	0.00848	0.00083	0.00083	0.00226	0.00226	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
4号機	0.00737	0.00738	0.02013	0.02013	0.00327	0.00327	0.00892	0.00892	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
5号機	0.00329	0.00329	0.00899	0.00899	0.01659	0.01660	0.04530	0.04530	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
6号機	0.00128	0.00000	0.00350	0.00000	0.00629	0.00612	0.01718	0.01671	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
7号機	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
8号機	0.00247	0.00247	0.00674	0.00674	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
9号機	0.00691	0.00123	0.01886	0.00336	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
10号機	0.00928	0.00737	0.02534	0.02013	0.00295	0.00000	0.00807	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000	0.00000
年間予測衝突 数（個体/年）	0.04435	0.02552	0.12106	0.06967	0.03998	0.02690	0.10914	0.07341	0.00725	0.00000	0.01980	0.00000

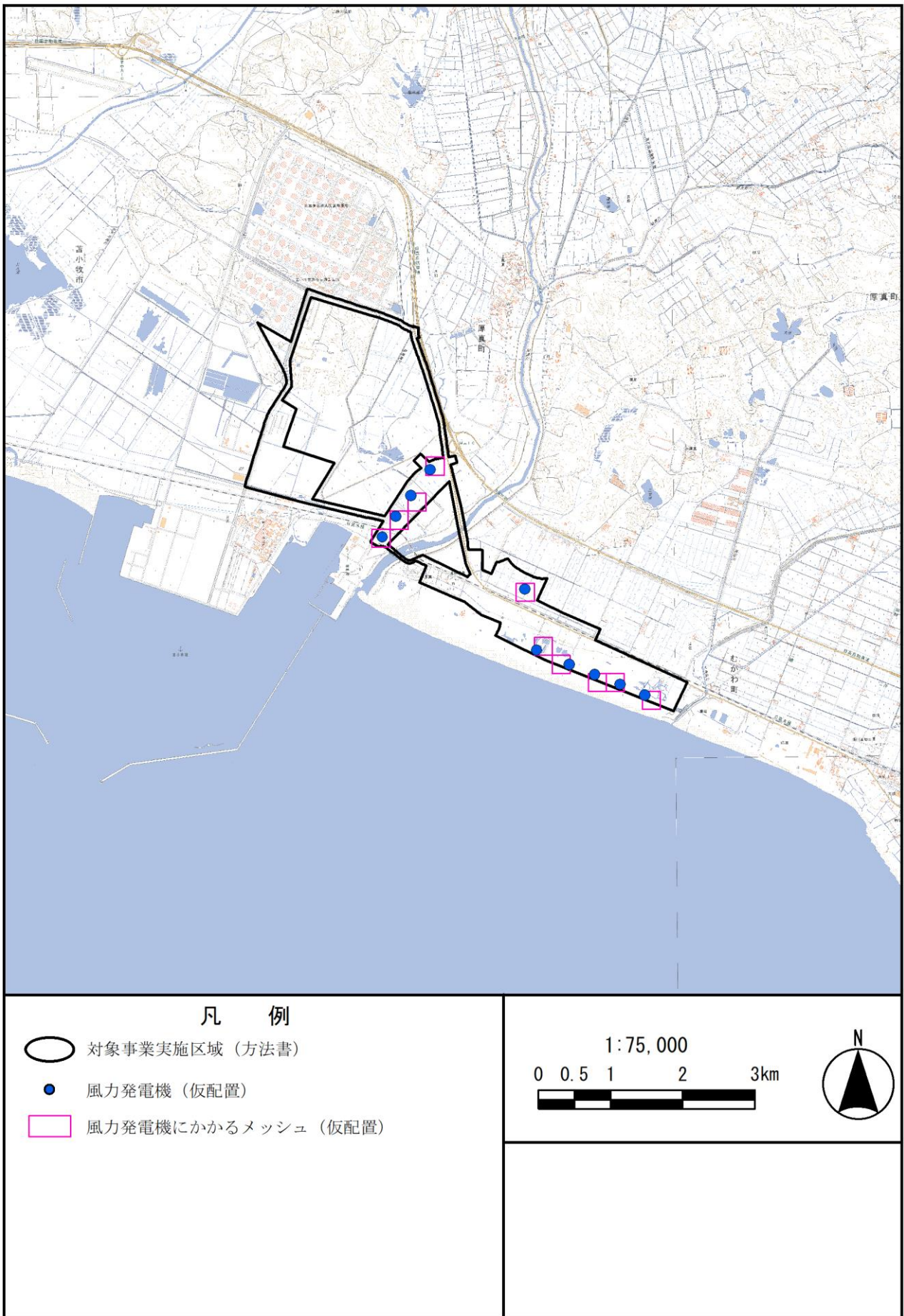


図 風力発電機設置案 (仮配置)

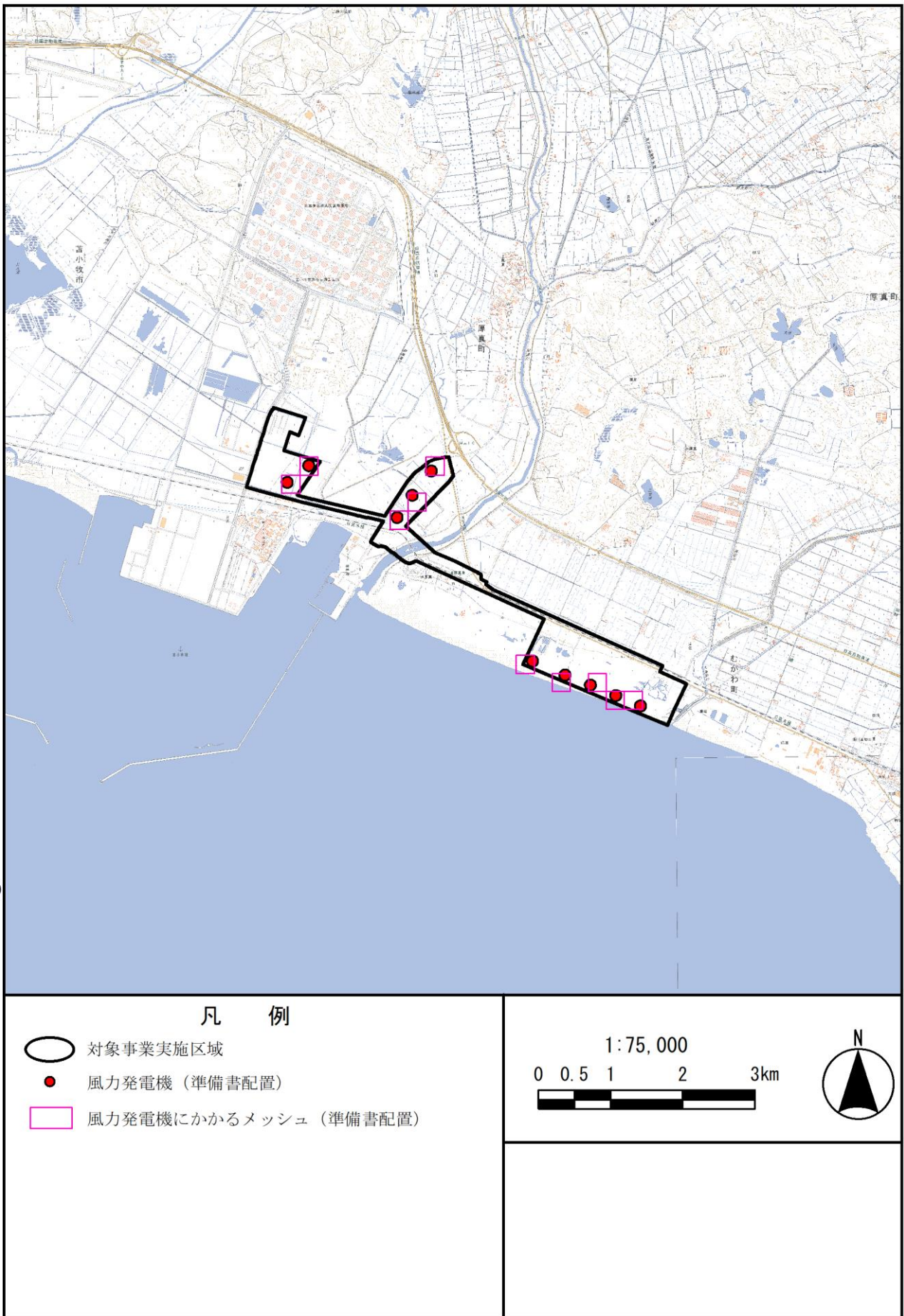


図 風力発電機設置案 (準備書配置)

表 影響が考えられる繁殖成功ペアの改変面積

ペア	面積 (ha)			行動圏全体における ヨシ原の割合 (%) ②/①	改変率 (%) ③/①
	①行動圏	②ヨシ原面積*	③改変区域*		
N1 ペア (令和 3 年)	137.60	35.36	1.31	25.70	3.71
N1 ペア (令和 4 年)	575.71	94.76	1.65	16.46	1.75
N2 ペア (令和 5 年)	716.30	86.84	1.94	12.12	2.23
N4 ペア (令和 3 年)	1,839.27	142.23	0.27	7.73	0.19

注：表中の※は行動圏内に含まれる各面積を示す。

## (仮定) 方法書風力発電機配置

風力発電機No.	ガン類			
	令和3年春季		令和5年春季	
	環境省モデル	由井モデル	環境省モデル	由井モデル
1号機	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
2号機	0.3296	0.8733	0.0824	0.2183
3号機	0.0402	0.1064	0.0797	0.2112
4号機	0.8370	2.2177	0.0684	0.1812
5号機	0.5625	1.4904	0.0956	0.2533
6号機	0.2275	0.6028	0.0000	0.0000
7号機	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
8号機	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
9号機	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
10号機	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
年間予測衝突数 (個体/年)	1.9968	5.2906	0.3261	0.8640

## 準備書風力発電機配置

風力発電機No.	ガン類			
	令和3年春季		令和5年春季	
	環境省モデル	由井モデル	環境省モデル	由井モデル
1号機	0.2059	0.5457	0.0000	0.0000
2号機	0.2368	0.6275	0.0018	0.0047
3号機	0.0402	0.1064	0.0797	0.2112
4号機	0.8370	2.2177	0.0684	0.1812
5号機	0.5625	1.4904	0.0956	0.2533
6号機	0.0282	0.0748	0.0117	0.0311
7号機	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
8号機	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
9号機	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000
10号機	0.0000	0.0000	0.0142	0.0376
年間予測衝突数 (個体/年)	1.9107	5.0625	0.2714	0.7191

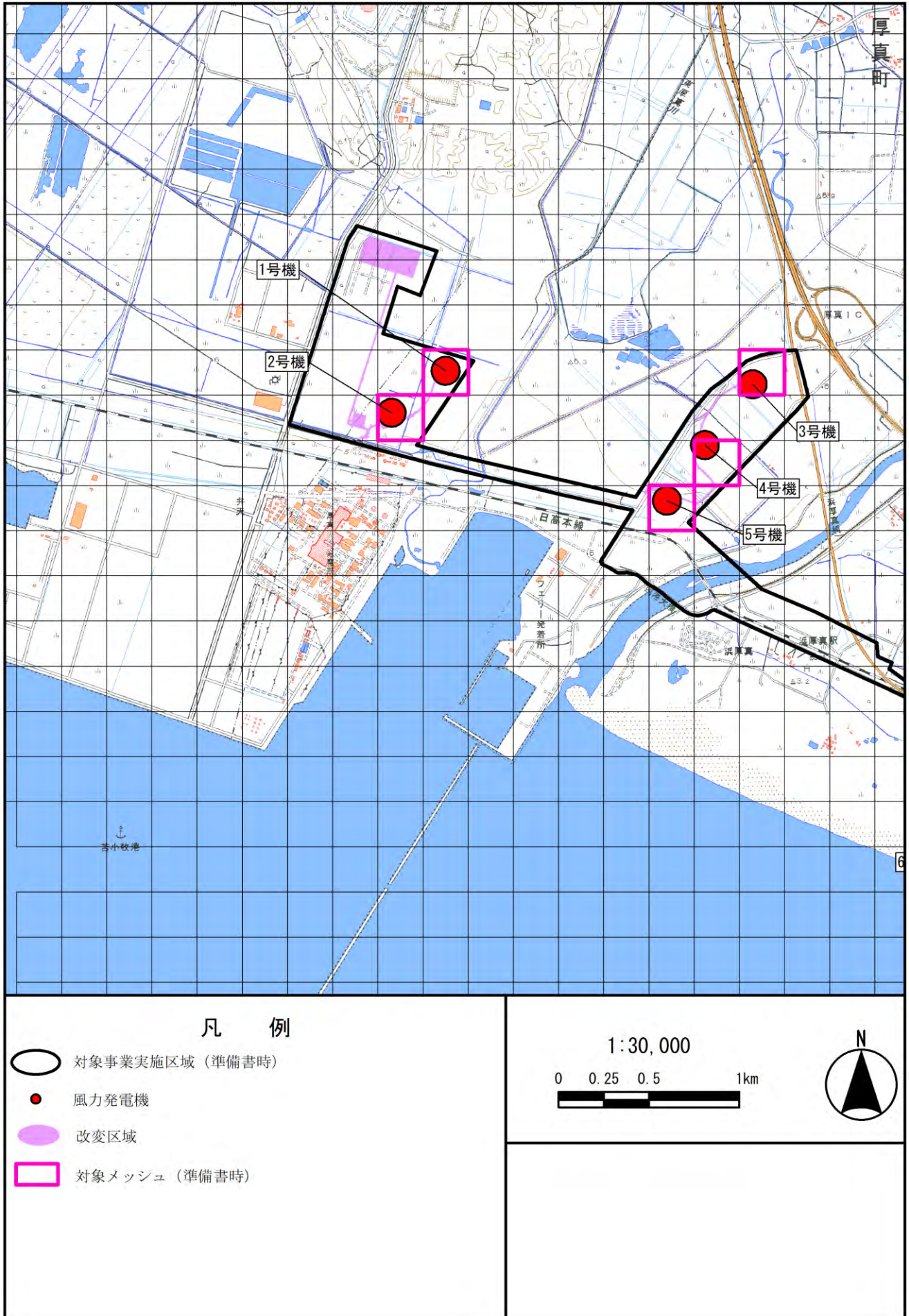


図1(1) 対象メッシュ図(準備書時)

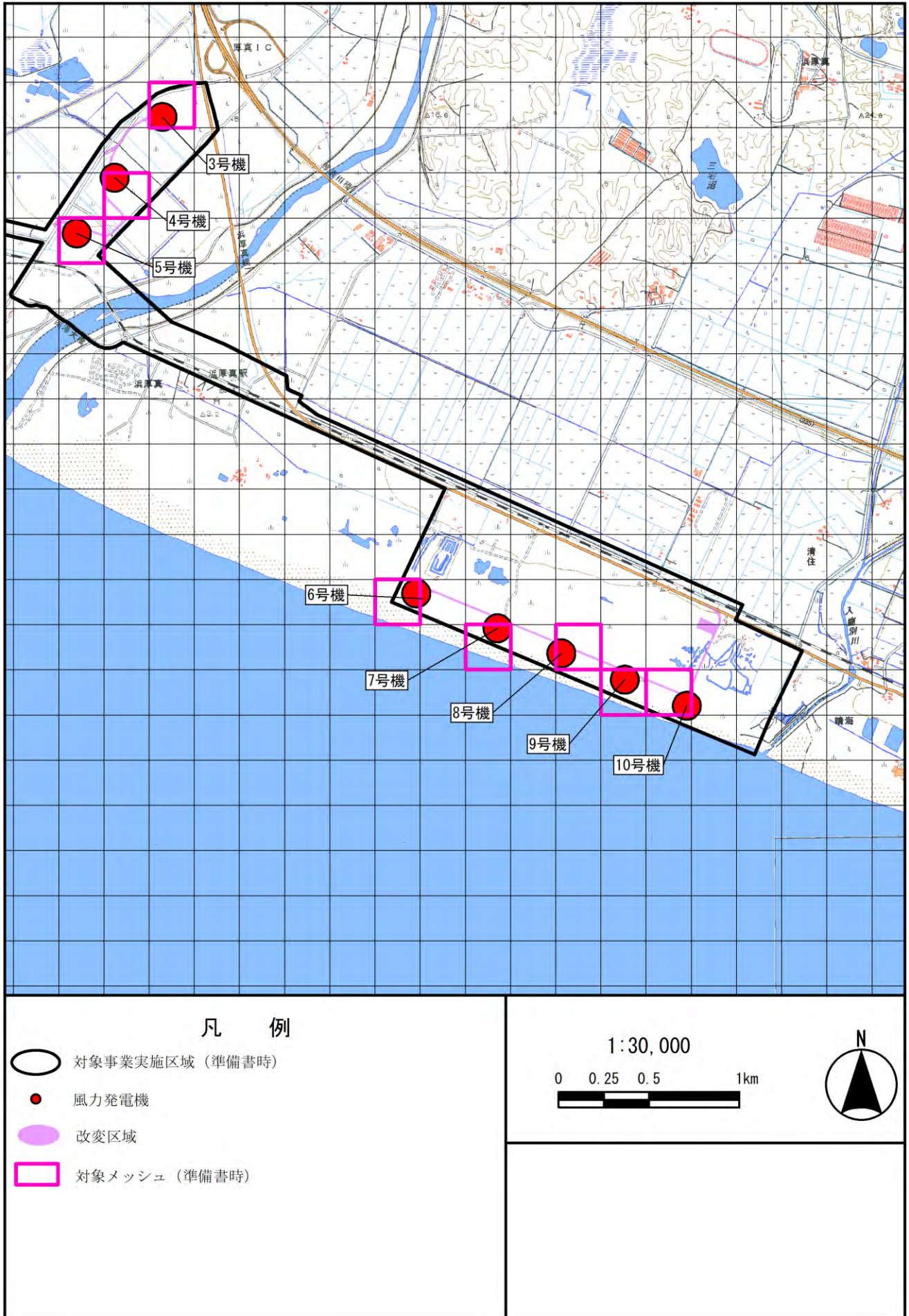


図2(2) 対象メッシュ図（準備書時）

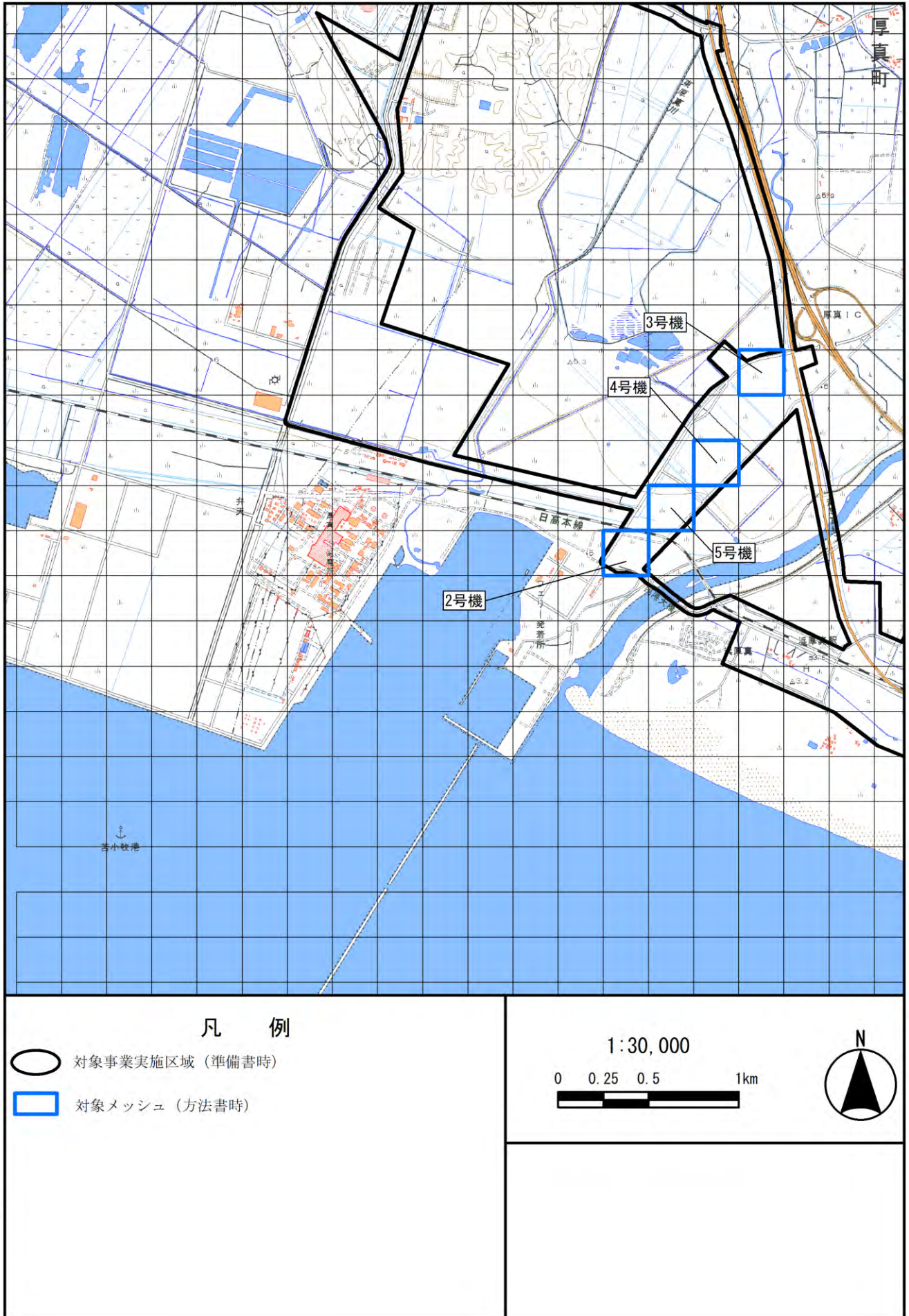
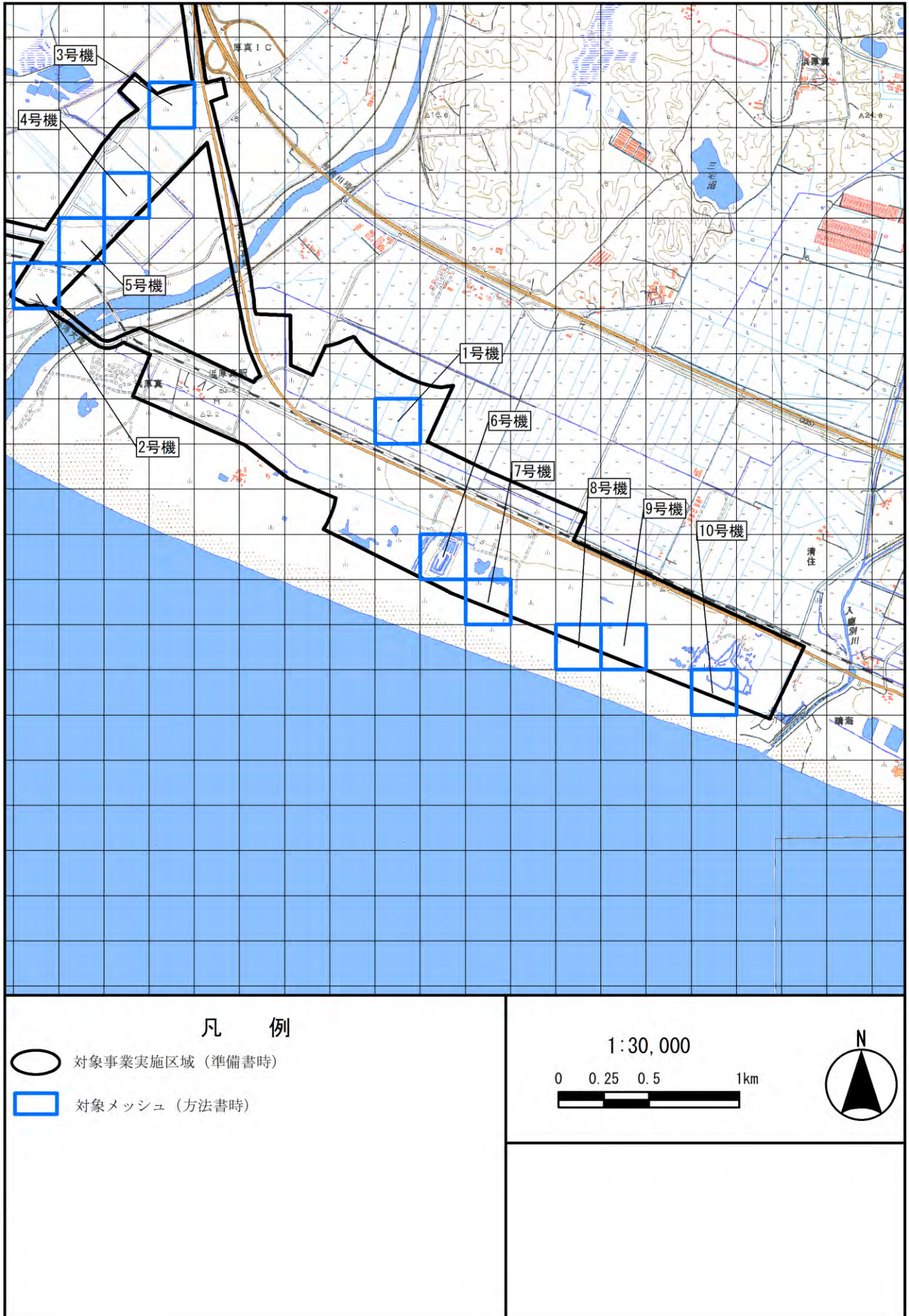




図2(3) 対象メッシュ図(方法書時)





凡 例

-  対象事業実施区域（準備書時）
-  対象メッシュ（方法書時）

1:30,000

0 0.25 0.5 1km



図2(4) 対象メッシュ図（方法書時）

※希少種保護のため非公開とします。

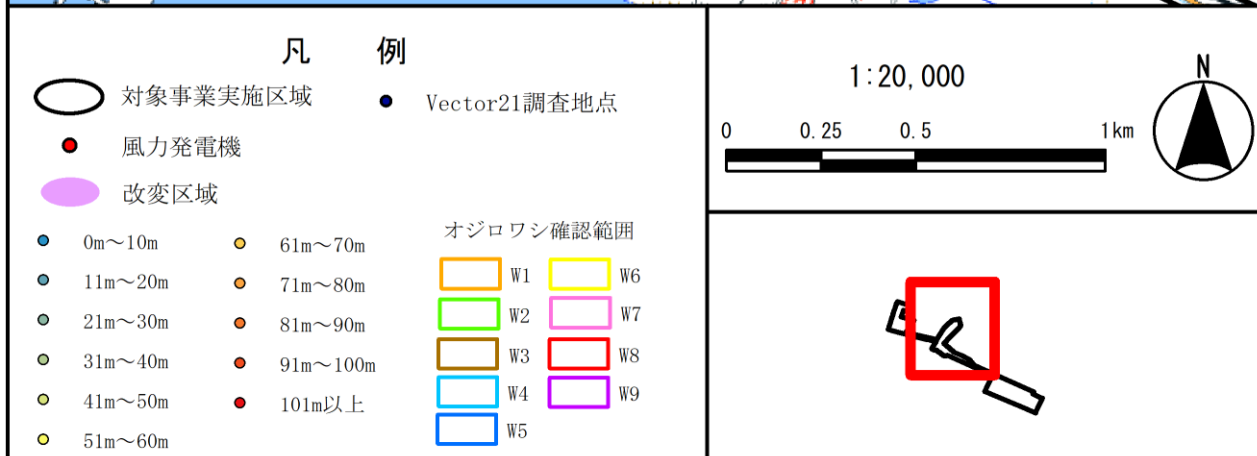
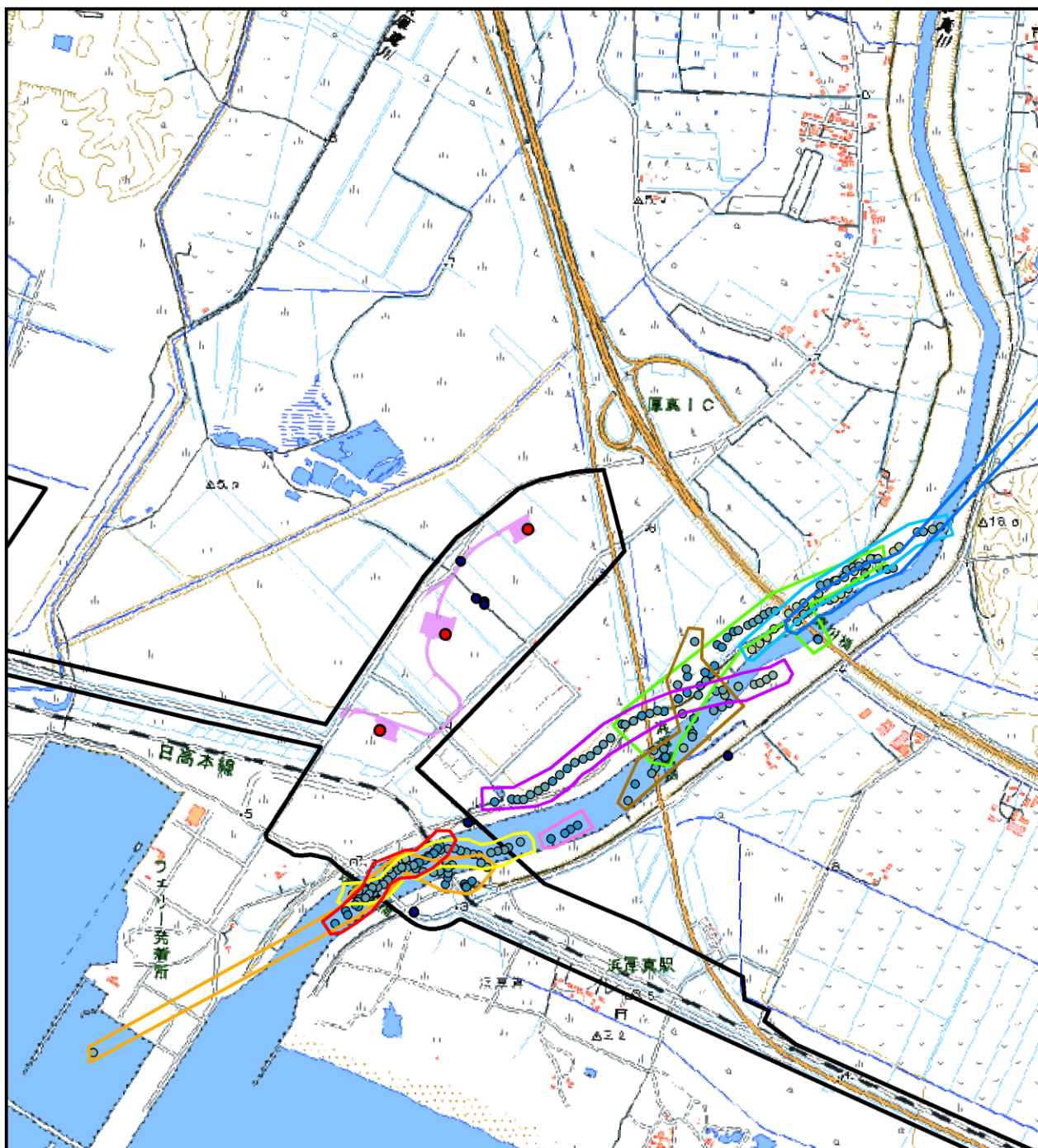


図 Vector21 によるオジロワシの飛翔状況

## (ウ) 重要な植物群落

事業の実施による重要な植物群落への環境影響要因として、「改変による生育環境の減少・消失」のほか、湿地や水域に分布する群落については、「濁水の流入による生育環境の悪化」も環境影響要因として抽出した。影響予測を行った重要な群落に対する環境影響要因の選定状況は表 10.1.5-19、影響予測は表 10.1.5-20 のとおりである。

予測対象とした群落は、現地において確認された植生自然度 10 及び植生自然度 9 の自然植生とした。また、東エリアの海浜部は特徴的な帯状分布を形成しており、影響予測の対象に加えた。

なお、「第 2、3、5 回自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査」（環境庁自然保護局 生物多様性センターHP、閲覧：令和 6 年 2 月）による特定植物群落については、対象事業実施区域に含まれないことから、対象からは除外した。

表 10.1.5-19 環境影響要因の選定（重要な植物群落）

群落名		環境影響要因	
		改変による生育環境の減少・消失	濁水の流入による生育環境の悪化
自然植生 (植生自然度 10)	ヨシクラス	○	○
自然植生 (植生自然度 10)	ホザキシモツケ群落	○	○
自然植生 (植生自然度 10)	オギ群集	○	○
自然植生 (植生自然度 10)	ヒルムシロクラス	○	○
自然植生 (植生自然度 10)	ハマナス群落	○	○
自然植生 (植生自然度 10)	ハマニンニクーコウボウムギ群集	○	○
自然植生 (植生自然度 10)	ヤマアワ群落	○	—
自然植生 (植生自然度 10)	ヒメガマ群落	○	○
自然植生 (植生自然度 9)	ハンノキーヤチダモ群集	○	—
自然植生 (植生自然度 9)	ハンノキ群落	○	—
自然植生 (植生自然度 9)	ヤナギ高木群落	○	○
自然植生 (植生自然度 9)	ヤナギ低木群落	○	○
自然植生 (植生自然度 9)	アキグミ群落	○	—
海浜部の帯状分布	(上記の植生自然度 10 と 9 を含む植生帯)	○	○

注：「○」は環境要因として選定、「—」は選定しないことを示す。

表 10.1.5-20(14) 重要な植物群落への影響予測（海浜部の帯状分布する植生）

確認状況及び生育環境	
<p>東エリアが位置する浜厚真海岸の東側は、次第に汀線が南に延び海浜が拡張している。昭和時代には、砂の採取などにより、海岸線が衰退した時期もあったが、次第に回復し、厚真火力発電所に関わる防波堤が造られたことにより、砂の堆積が多くなり、現在に至っているようである。現在も浜厚真海岸の中央付近では、砂の採取が見られ、対象事業実施区域となる東側では、内陸側に昭和時代に砂採取で掘り下げられた地形が湿性草地として分布し、汀線までの海浜部は波や風により、砂が常に環境を攪乱する乾性草地となっている。</p> <p>汀線から順に乾燥草地のハマニンニク-コウボウムギ群集、その内陸側にヤマアワが主体となる群落帯状に分布し、さらに内陸側にヨシを主体とする湿地草地の中に、ヒメガマ群落やヒルムシロクラスが分布する海浜を形作っている。各群落の状況は、上記に記載した。</p>	
影響予測	
<p>変更による生育環境の減少・消失</p>	<p>帯状分布の植生には変更区域が含まれることから、事業の実施により生育環境が減少・消失する可能性がある。しかし、変更される場所は、主に乾性草地であり、風により砂が常に環境を攪乱する範囲であり、管理道やヤード部の高さは現在の地盤高に合わせることで、風の影響をできる限り変えない計画とすることから、影響は小さいものと予測する。また、湿性草地部を分断するような管理道となるものの、以前は道として利用した地形を可能な限り活用することで、湿性草地の変更を少なくし、変更による生育環境の減少・消失による影響を低減できるものと予測する。</p>
<p>濁水の流入による生育環境の悪化</p>	<p>工事の実施に伴い、帯状分布の植生のうち、湿性草地への濁水が流入し、生育環境が悪化する可能性がある。しかし、造成工事においては、開発による流出水の増加に対処するため沈砂池工事を先行し、降雨時における土砂の流出による濁水の発生を抑制する等の環境保全措置を講じることから、濁水の流入による生育環境の悪化の影響を低減できるものと予測する。</p>